

「とか」「ってゆうか」のコミュニケーションと友人関係 関西大学生調査報告書

目次

§ 1 . 調査の目的	p. 1
§ 2 . 調査の概要とデザイン	p. 3
§ 3 . 調査結果(1) 8つの若者語の受容実態	p. 5
§ 4 . 調査結果(2) 「とか」「ってゆうか」と友人関係	p. 9
§ 5 . 調査結果(3) 携帯電話・電子メール利用と友人関係	p.16
参考文献	p.21
付録(調査票と単純集計結果)	p.22

1999年9月10日

辻 大介
(関西大学社会学部 専任講師)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35
e-mail to : tsujidai@ipcku.kansai-u.ac.jp

§ 1 . 調査の目的

本調査は、1998年4月に東洋大学朝霞キャンパス（埼玉県）の大学生を対象に行ったアンケート調査の続編にあたり、そこで得られた知見のさらなる検証と補完を意図して行われたものである。したがって、その主目的は前回と同じく、次に挙げるような若者語の使用と対人関係意識——特に友人関係に関する——との関連を探ることにある。略述しておこう。

1990年代に入ったあたりから、対人関係面において問題化される若者語がいくつか登場してきた。例えば、次のような新聞記事中にみられる「とか」弁、「みたいな」「ってゆうか」などである。（下線は引用者による）

社員教育を専門にする東京・高輪のテンポラリーエデュコンサルも、この春約百社からの依頼を受けた。……インストラクターの長谷川三紀さん（35）は…若者の「とか」弁に、今年も悩まされた。「コピーとか必要ですか？」「会議とかやるんですか？」「みたいな」「というか」「だったりして」なども多い。いずれも、ものごとを断定せずにそれとなくはぐらかす表現。「斜に構えて、相手に真正面から対することをよしとしない若者の心模様がかいま見える」と長谷川さん。「ビジネスではごまかしの言葉は通用しない」といっても、なかなか直らない。複雑な人間関係から逃げる根本が変わらないと直らないと、思っている。

（読売新聞 1993年4月22日付朝刊より）

一般的な印象論として、確かにこうした若者語の背後には、「人間関係から逃げる」かのような、「相手に真正面から対することをよしとしない」かのような、対人関係意識が潜在しているように感じられる。それはまた、例えば、対人的関係を忌避して自分の殻に引きこもる「オタク」的若者像や、あるいは、互いに傷つけ合うことに過敏な「マサツ回避の世代」（千石 [1994]）、「やさしさの精神病理」（大平 [1995]）より一般的にいえば、傷つくことを恐れて本音を話さず表層的なやりとりに終始する希薄化した人間関係、といった現代若者論の主論調を思い起こさせるものでもある。

しかし、はたしてこれら 1990年代に登場した若者語のニューフェイス——「とか」「ってゆうか」「みたいな」など——の背後にあるのは、対人関係から逃げる意識あるいは浅く希薄な表面的な対人関係を好む意識なのだろうか。ことさらにこの点を疑問視するには、二つの根拠がある（詳細は辻 [1999b] [1999c] を参照）。

一つは、現代の若者の特徴としてしばしば論じられる対人関係の忌避や希薄化、表層化、不活発化などが本当であるか、疑わしいことだ。少なくとも信頼に足るいくつかの社会調査の結果をみる限り、若者の対人関係が希薄化したり不活発になったりした形跡はみられない。むしろ友人の数は増えているし、つきあいが表面的になってもいい。若者の人間関係が希薄化したとか、「オタク」化・孤独化したとかいった論調はある種の錯覚である公算が大きいのである（その錯覚がどこから生じたかは橋元 [1998] に述べられている）。

もう一つは、「とか」「ってゆうか」などの若者語を用いることに、話者の本音をぼかして伝わりにくくしたり、会話を表層的なやりとりにとどめおくなどといった積極的な機能

があるとはおよそ考えられないことである。それはむしろ発話内容（何を話すか）の選択に関わる問題であり、こうした若者語を用いるか用いないか（どう話すか）の選択に関わるものではない。したがって、これらの若者語の背後に希薄な・表層的な対人関係を想定するのは基本的に筋違いといえる。

むしろ語用論の観点から考えるならば、「とか」「ってゆうか」などのもつ対人関係上の機能の正確なところは、言語行為の設定する対人関係へのコミットメントを弱める・緩める、というものである（この点に関する語用論的分析の詳細は辻 [1996] [1999b]）。言い換えれば、コミュニケーションにおける対人関係に拘束されることを回避する——対人関係そのものを回避するのではなく——はたらきである。

以上のことから、弱い仮説（より消極的な仮説）と強い仮説（より積極的な仮説）の二通りを導くことができる。

弱い仮説：「とか」「ってゆうか」などの若者語の使用と、希薄な対人関係を志向する意識（その極端な形として対人関係そのものを忌避する意識）とは、結びついていないだろう。

強い仮説：それらの若者語の使用は、束縛されない対人関係を志向する意識と結びついているだろう。

前者は対人関係の親疎、喩えていえば対人関係の“深い - 浅い”または“濃い - 薄い”に関わる仮説であり、後者は対人関係の束縛性、その“重い - 軽い”に関わる仮説である。

前回の東洋大学生調査では、辻 [1999b] に報告したとおり、上記の弱い仮説を支持し、また、強い仮説についても部分的に支持する結果が認められた。「部分的に」というのは、対人関係の“軽さ”に関する心理態度尺度として設定した2項目のうちの1項目（対人関係の切り替え志向）についてのみ、ここで問題としている若者語の使用頻度との間に有意な正の相関がみられた、ということである。

ただ、仮説に肯定的な結果が得られたとはいえ、地域的にも限定された一大学の学生を対象とした調査であり、あくまでケーススタディの域をこえるものではない。そこで、その補足として行ったのが、今回の関西大学生調査である。依然として調査対象が限定されているというサンプリング上の欠点は免れえないが、仮に前回（首都圏）と今回（関西圏）で同様の傾向が認められたとすれば、それはかなり robust な傾向とみなせよう。

先走りすることになるが、結果から言ってしまうと、まず弱い仮説については今回の調査からも支持が得られた。「とか」「ってゆうか」などの若者語の使用頻度は、希薄な・表層的な友人関係への志向とは結びついていない。一方、強い仮説については、今回の調査では前回と異なって支持する結果が得られず、当該の若者語の使用頻度は、対人関係の非束縛性への志向と無関連であった。むしろ別の対人的心理傾向との間にかかなりはっきりとした相関がみられる。これに関する解釈は § 4 で述べることにしたい。

以下、今回の調査概要を記述した後（§ 2）、調査結果を、若者語に対する意識や使用頻度（§ 3）、若者語の使用頻度と友人関係との関連（§ 4）、通信メディア利用と友人関係との関連（§ 5）に分けて報告する。

§ 2 . 調査の概要とデザイン

調査は 1999 年 7 月 6 日、関西大学社会学部（大阪府吹田市）で筆者の担当する「情報メディア論」の受講生に対して行われた。講義の最後にアンケートを配布し、回答を自記させた後、即時回収。回収数は 200 票であり、うち海外からの留学生の回答を除いた 198 票を有効回答とした。回答者の年齢分布は 20～24 歳であった。

アンケートの主な内容は、前回調査と同じく、若者語に関する設問、友人関係に関する設問、（友人相手の）通信メディア利用に関する設問に大別される。

若者語については、前回と同じ 8 語を取り上げたが、設問文中でそれを提示する際の例文は、地域性を考慮して関西弁に変更した^注。以下の A)～H) がその 8 語であり、それぞれについて耳にする頻度や自分で使う頻度などをたずねた。（C は前回調査では「超」を提示したが、関西弁ではほぼ同じ意味合いの若者語として「めっちゃ」が用いられることの方が多い。が、「超」も使われないわけではないので、次善の策として括弧入れして併記し、回答者には口頭でどちらを念頭において回答してもよい由を指示した。）

- 群 B) 「なんか体の調子、悪そうやん。カゼでもひいた？」
「ってゆうか、ちょっと疲れてるだけ」
- D) 「あの映画、おもしろかった？」
「まあ見ても損はせえへんかな、って感じ」
- F) 「今度の日曜、梅田とか行って、映画とか見いへん？」
- H) 「就職活動、がんばってる？」
「ぼちぼち気合い入れようかなあ、みたいな」
- 群 A) 「あんまりしつこいから、完全にキレてしもた」
- C) 「今日のバイト、めっちゃ（超）疲れた」
- E) 「きのうの抜き打ちテスト、みんなパニクってた」
- G) 「今、スキーにはまってんねん」

群の 4 語が調査仮説検証の焦点となる若者語（＝対人関係へのコミットメントを緩和する語用論的機能をもつ）であり、群の 4 語は群と対照するための若者語（＝特にそうした語用論的機能をもたない）である。例えば、仮説どおりの相関傾向が群の若者語の使用とある心理態度スケールとの間に認められたとしても、それは若者語一般についてみられる傾向である可能性が残るため、それだけでは仮説が支持されたとするには不十分だろう。そのために設定した比較対照群が群である。また、群の語の選定にあたって

注 関西弁で例示したことが、関西圏出身者とそれ以外の地域の出身者の回答に影響するのではないか、という懸念もありえようが、出身地（大学入学以前に暮らしていたところ）が近畿二府四県か／それ以外かの別で、各若者語を耳にする頻度や使用する頻度を比較してみたところ（Wilcoxon の順位和検定）すべてにおいて統計学的に有意な差は認められなかったことを付記しておく。

は『現代用語の基礎知識』（自由国民社）に5年以上にわたって掲載され続けているという基準を設けた。群の若者語には単なる流行語の域をこえて長期にわたって使われ続けているという特徴があり、この点の基準をそろえるための措置である。

友人関係については、前回調査の設問を基本的に踏襲しつつ、若者・青少年を対象とした各種の社会調査を参考に、かなりの設問数を追加した。

前回の調査でコアとなったのは、友人関係の親疎（“深い - 浅い”）についてたずねる意図で設問した i) ~ iii) と、友人関係の束縛性（“重い - 軽い”）についてたずねる意図で設定した iv) ~ v) の、5問である。

- 親疎性 i) 友だちには悩みごとの相談ができる
- ii) 友だちとはあまり気をつかわずにつきあえる
- iii) 友だちとは悪いことは悪いと言い合える
- 束縛性 iv) 仲のいい友だちでも、ずっといっしょにいると離れていなくなる
- v) どこに何をしに遊びに行くかによって、いっしょに行く友だちを選ぶ

iv) と v) については、特定の友だちと常にべったりいっしょにいるかどうかを違う形でたずねた設問として意図したのだが、分析結果からみると、これらの相関値は低く、ある程度異質であることが示唆されたため、今回の調査では、予め友人関係意識を類別しておいて分析を行うのではなく、調査結果からボトムアップ式に友人関係意識の類別を因子分析によって図ることにした。友人関係に関する設問を増やしたのもそのためである。また、束縛性に関する設問は、前回調査で仮説通り 群に特殊に有意な相関がみられた v)（友人関係の切り替え志向）はそのまま残し、相関がみられなかった iv) については、今回調査では次の2設問に分けてさらに詳しくたずねることにした。

- iv)-a 仲のいい友だちでも、ずっといっしょにいると一人になりたくなる
- iv)-b 仲のいい友だちでも、ずっといっしょにいると別の友だちと話したくなる

通信メディア利用については、友人関係において大きな役割を果たしているだろう電話メディアの利用行動と意識を中心に設問し、若者層への普及著しい携帯電話に関する設問を前回より詳細にした。また、これも急速に普及しつつある電子メール利用に関する設問を新たに設けた。ちなみに、前回の調査結果にみられた上述 v) の友人関係の切り替え志向と携帯電話利用の親和性は、今回の調査でもある程度確認されている。

その他の設問項目や具体的な設問形式については、末尾の付録「調査票と単純集計結果」を参照されたい。

§ 3 . 調査結果(1)—— 8 つの若者語の受容実態

今回の調査では、先述の若者語 8 語について、前回調査と同じく、接触頻度（どれくらい耳にするか）・違和感（耳障りに感じるか）・使用頻度・「若者語」としての認知度（若者だけのことば遣いだと思うか）をたずね、また、使用域意識（目上の人に対して使ってもよいか）に関する設問を新たに設けた。以下、単純集計結果を中心に順に記述していく。

図 3.1、図 3.2 はそれぞれ、周囲の友人や知り合いからこうしたことば遣いを耳にすることがあるか（パーソナルな経路を介した接触頻度）、テレビやラジオで芸能人・タレントなどから耳にすることがあるか（マスメディアを介した接触頻度）を示したものである。

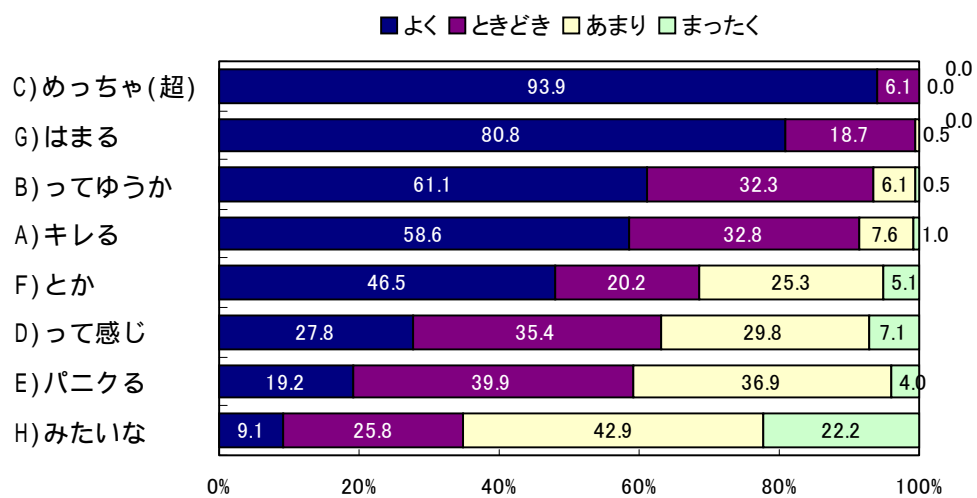


図 3.1 パーソナルな経路を介した各若者語の接触頻度

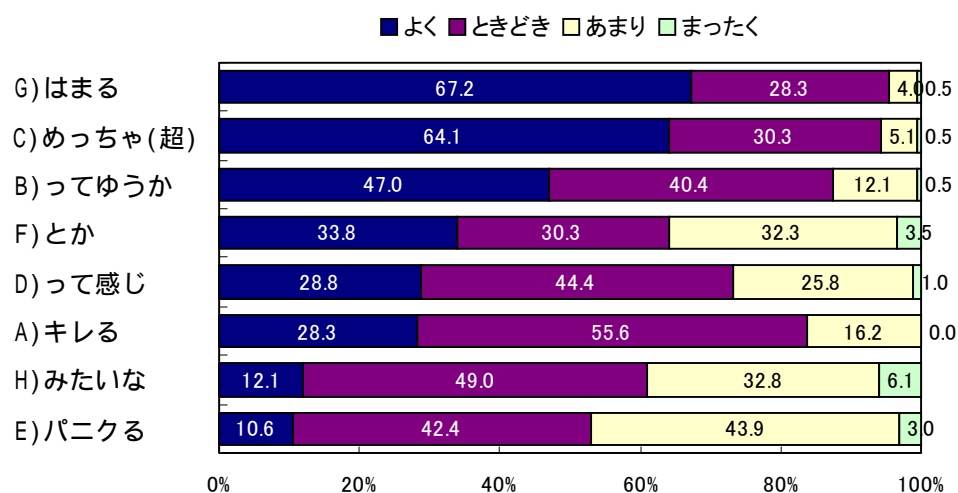


図 3.2 マスメディアを介した各若者語の接触頻度

若者語ごとに接触頻度の分布にはかなりばらつきがみられるが、パーソナル・マスメディ

アともに、どの語がよく耳にされるかという相対順位や相対的な頻度分布に大きな違いはなく、言語環境として一定の共通性を示している。また、この相対順位や相対的な頻度分布は、前回の東洋大学生調査の結果ともよく似通っており、これらの若者語の普及状況に大きな地域差があるようには思えない。

次に、これらの若者語を耳にしたとき、耳障りに感じたり気になったりするかどうかの回答分布を示したものが図 3.3 である。一般的に予想されるように、よく耳にされる語ほど耳障りに感じられない傾向が確認できる。

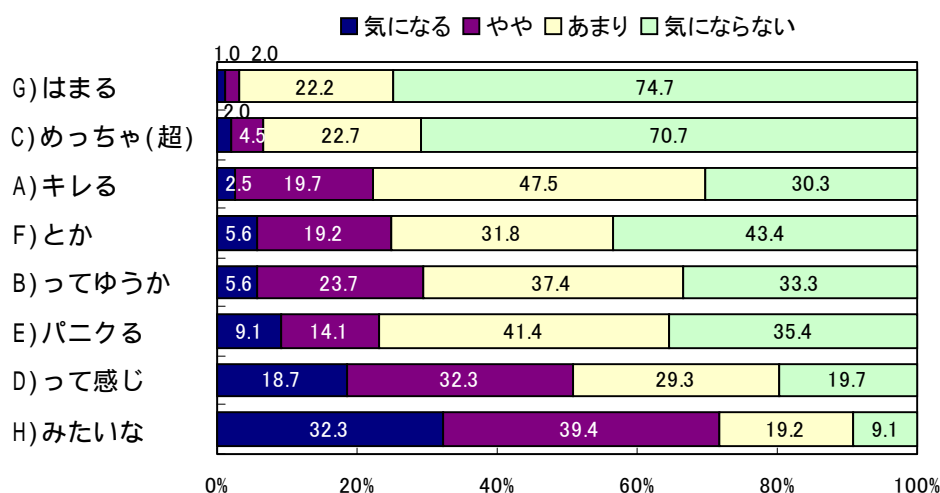


図 3.3 各若者語に対する違和感

また、使用頻度についてみると(図 3.4) これも予想されるとおり、よく耳にする語・耳障りに感じない語ほど自分でもよく使っているという傾向にある。この使用頻度に関する各語の相対順位・頻度分布も前回調査の結果とよく似通っている。

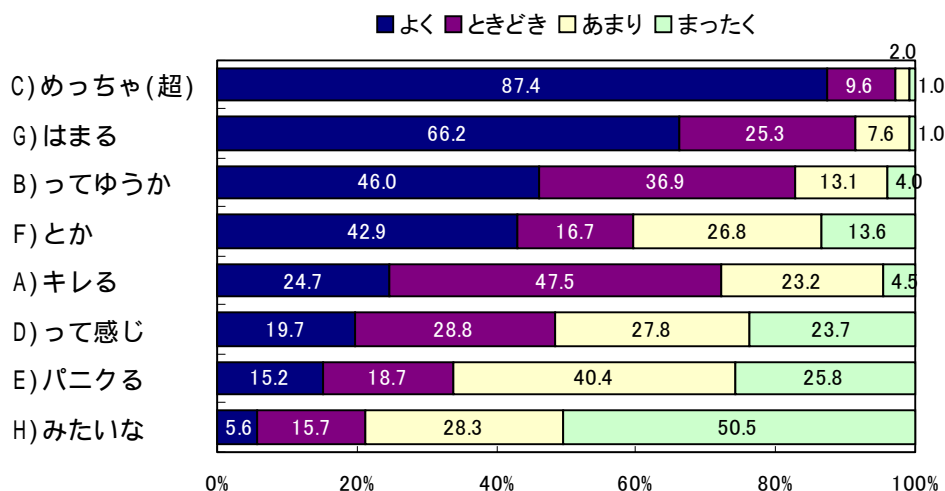


図 3.4 各若者語の使用頻度

つづいて、各語が「若者語」として認知されているか(こうしたことば遣いをするのは若者だけだと思うか)をみたものが、図 3.5 である。おおよそのところ、よく耳にする語・自分でよく使う語ほど、若者だけのことば遣いではないとみなされる傾向がうかがえる。

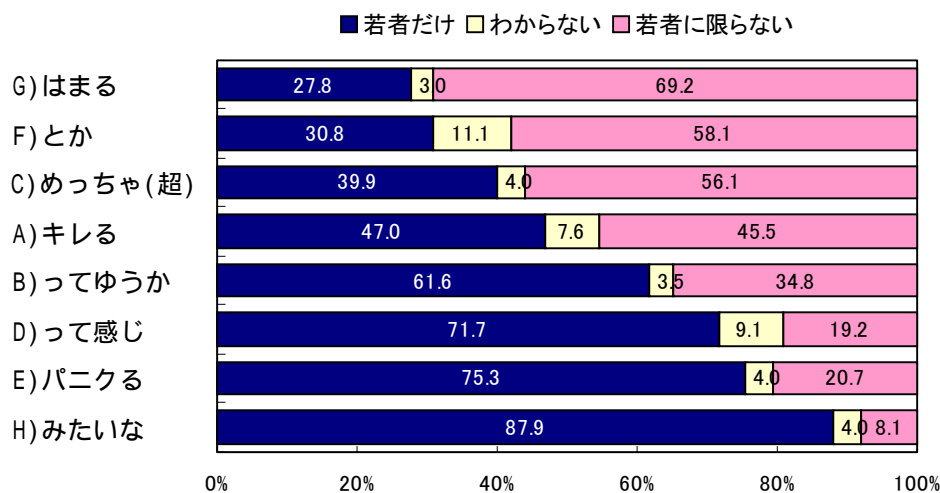


図 3.5 「若者語」としての認知度

各語の使用域に関する意識(図 3.6)と併せてみると、やはり「若者語」という意識のある語ほど、その語を使う相手は親しい間柄に限った方がよいとみなされる傾向にある。

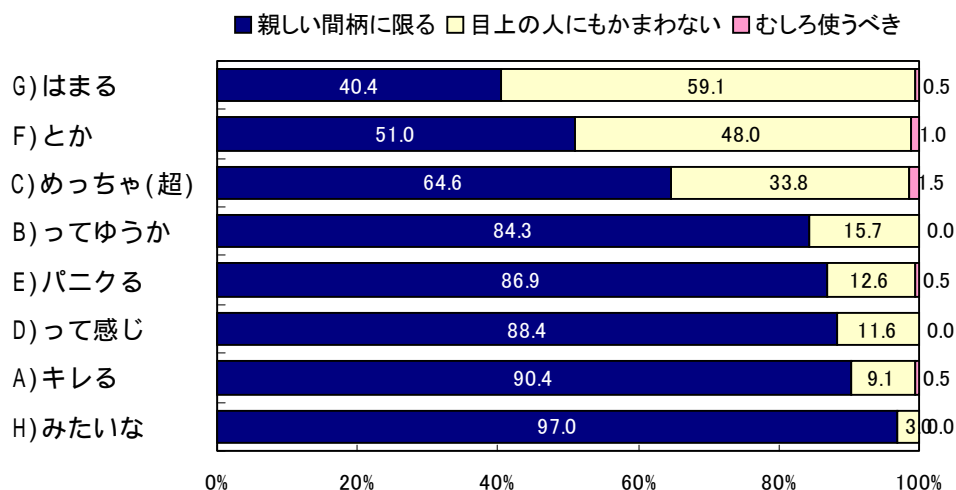


図 3.6 各若者語の使用域に関する意識

この設問は、「とか」などの対人関係上の語用論的機能をもつ若者語(つまり先述の 群の若者語)と丁寧さ(politeness)意識の関連を探るために、今回の調査で新たに加えたものである。前回調査の結果を学会発表したところ(辻[1999a])、専修大学文学部の永瀬治郎教授より次のようなコメントを受けた。永瀬教授自らの行われた若者語に関する調査によ

れば、「とか」「ってゆうか」などは、友人に対してよりむしろことは遣いの丁寧さに配慮を要する目上の人やあまり親しくない人に対して使われる傾向があり、それゆえ語の使用域と語の使用に関する丁寧さ意識を考慮する必要があるのではないかと、との指摘である。

が、図 3.6 に示されるとおり、どの語に関しても“目上の人にはむしろ使うべき”とする積極派は 1%内外のごく少数であり、群の語 (B,D,F,H) と 群の語 (A,C,E,G) に差がみられるわけでもない。つまり、今回の調査ではとりあえず語の使用に関する丁寧さ意識との関連は見いだせなかったわけだが、微妙な丁寧さ意識を今回の一設問から洗い出せたとするにも無理があるだろう。あくまで今後の検討を要する暫定的結果とするにとどめておきたい。

最後に、各語の使用頻度と接触頻度・性別との相関を表 3.1 にまとめておく (数値は Spearman の順位相関係数)。性別については男性を 0・女性を 1 としたダミー変数を設定して計算してある (相関係数が正の値なら女性ほどよく使う、負の値なら男性ほどよく使うことを表す)。

表 3.1 各若者語の使用頻度と接触頻度・性別との相関

		接触頻度		性別
		パーソナル	マスメディア	
群	B) ってゆうか	.64 ***	.24 ***	.18 *
	D) って感じ	.75 ***	.42 ***	.39 ***
	F) とか	.82 ***	.63 ***	-.02
	H) みたいな	.67 ***	.32 ***	.22 **
群	A) キレル	.56 ***	.14	.10
	C) めっちゃ	.36 ***	.17 *	.19 **
	E) パニクる	.71 ***	.42 ***	.08
	G) はまる	.55 ***	.47 ***	.14

(*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 の有意性を表す)

いずれの語についても、マスメディアを介した接触頻度より、パーソナルな経路を介した接触頻度との相関値の方が高く、パーソナルな言語環境の方が若者語の使用により大きく影響する要因であることがうかがえる。また、性別では概して女性の方が使用頻度が高い。これらの傾向は前回調査でも同様であった。

§ 4 . 調査結果(2)——「とか」「ってゆうか」と友人関係

この節では、「とか」「ってゆうか」「って感じ」「みたいな」という若者語——言語行為の設定する対人関係へのコミットメントを弱める語用論的機能をもつ 群の 4 語——の使用がどのような友人関係スタンスと関連しているか、に関する分析結果を報告し、調査仮説の検証にあてる。

分析の手続きは以下のとおりである。まず、 群と 群それぞれの使用度スケールを、各群 4 語の使用頻度“よく”～“まったく”に 4～1 点を与え、それらを単純加算して構成する。(この際、各語についてパーソナルな経路・マスメディアいずれを介しても耳にしたことがないと回答している場合は、使用頻度得点を欠損値として分析から除外した。耳にしたことのない語を使わないのは論理的に当然のことであり、その影響を排除するためである。)次に、これらの使用度スケールと友人関係スタンスに関わる諸項目との相関係数を算出し、 群・ 群で比較することによって、 群に特殊に相関の認められる友人関係スタンスを明らかにする。

今回の調査では、§ 2 に述べたとおり、友人関係意識の構造を因子分析によって探ってみようとしたため、前回より友人関係の設問数が増えている。全設問を簡略化して一覧にしておこう(正確な設問文は末尾の付録を参照されたい)。なお、Q2 以外はどの設問も 4 段階の順序尺度をなす選択肢で回答させている。

Q2	友人数
Q3-1	友人には悩みの相談ができる
2	あまり気を使わずにつきあえる
3	悪いことは悪いと言い合える
Q4-1	友人によって自分の性格が変わる
2	仲のいい友人でもずっと一緒にいると、一人になりたくなる
3	仲のいい友人でもずっと一緒にいると、別の友人と話したくなる
4	どこに何をしに遊びに行くかによって友人を選ぶ
Q5	互いに寄りかからない友人関係より、何かにつけ助けあい相談しあえる関係がよい
Q6-1	友人は多いにこしたことはない
2	ふだん友人と行動することが多い
3	一人より友人といる方が落ち着く
4	友だちとはできるだけケンカしない方がよい
5	互いに傷つくことがあっても、距離をおかない友人関係がよい
Q7-1	友人とは、まめに会うことが重要
2	まめに電話をかけることが重要
3	話のノリが合うことが重要
4	ものの考え方が合うことが重要
5	ものの感じ方が合うことが重要
6	趣味や好み合うことが重要
7	自分の本音を話すことが重要
8	べったりしすぎないことが重要

これらの因子分析の結果は後にみることにして、とりあえずは総当たり式に各設問と群・群の若者語の使用度スケールとの相関を、表 4.1 にみてることにしよう（数値は Spearman の順位相関係数）。

表 4.1 若者語 群・群の使用頻度と友人関係スタンスとの相関

	群	群
Q2 友人数	.09	.20 **
Q3-1 悩みの相談ができる	-.05	-.03
2 あまり気を使わずにつきあえる	-.08	-.07
3 悪いことは悪いと言い合える	-.15 *	-.11
Q4-1 友人によって自分の性格が変わる	.04	.03
2 ずっと一緒だと、一人になりたくなる	.10	.03
3 ずっと一緒だと、別の友人と話したくなる	.09	.06
4 どこに何をしに遊びに行くかによって友人を選ぶ	.08	.07
Q5 何かにつけ助けあい相談しあえる友人関係がよい	.13	.12
Q6-1 友人は多いにこしたことはない	.10	.12
2 ふだん友人と行動することが多い	.05	.18 **
3 一人より友人といる方が落ち着く	-.02	.14 *
4 友人とはできるだけケンカしない方がよい	.06	.14 *
5 傷つくことがあっても、距離をおかない友人関係がよい	.03	-.07
Q7-1 友人とは、まめに会うことが重要	.26 ***	.09
2 まめに電話をかけることが重要	.25 ***	.07
3 話のノリが合うことが重要	.16 *	.20 **
4 ものの考え方が合うことが重要	.15 *	.04
5 ものの感じ方が合うことが重要	.10	.06
6 趣味や好み合うことが重要	.14	.00
7 自分の本音を話すことが重要	.01	.00
8 べったりしすぎないことが重要	-.03	-.03

(*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 の有意性を表す)

群にのみ有意な相関がみられたのは、Q3-3「悪いことは悪いと言い合える」、Q7-1「まめに会うことが重要」、Q7-2「まめに電話をかけることが重要」、Q7-4「ものの考え方が合うことが重要」の4項目である。

Q3-1～3 は前回調査で友人関係の親疎に関わる項目として設問したものであり、前回は群の若者語をよく使う者ほど友人関係が親密である傾向がみられたのだが、今回は逆に疎遠な傾向が認められる（Q3-3における負の相関）。これは、§1 に述べた弱い仮説（群の若者語の使用は希薄な対人関係への志向と結びついていない）の却下を示唆するものだが、後述する友人関係スタンスの因子との相関分析の結果を考慮すると、群の若者語の使用が希薄な対人関係への志向と関連している可能性はむしろ低いように思われる。

また、前回調査では有意な正の相関が認められた Q4-4 の友人関係の切り替え志向（友人関係の束縛性に関する一設問）と群の若者語との間には、今回は有意な相関が認められなかった。これは、強い仮説（群の若者語の使用は束縛されない対人関係への志向と結びついていない）の却下を示唆するものだが、これも後述の因子分析の結果を勘案すると、解釈に微妙な点があるので、とりあえず今は留保をおいておく。

今回の調査で、群の使用に特殊に最もはっきりした相関がみられたのは、Q7-1「友人とはまめに会うことが重要」、Q7-2「まめに電話をかけることが重要」の2項目である(いずれも $p < .001$ の有意性)。群の4語それぞれと相関をとってみても、表4.2に示されるとおり、ほとんどすべてに有意な正の相関が認められる。

表4.2 各若者語の使用頻度とQ7-1・Q7-2との相関

		Q7-1.まめに会う	Q7-2.まめに電話
群	B) ってゆうか	.14*	.01
	D) って感じ	.18*	.21**
	F) とか	.16*	.21**
	H) みたいな	.15*	.20**
群	A) キレル	-.03	.02
	C) めっちゃ	.05	-.06
	E) パニックる	.12	.07
	G) はまる	.11	.10

(** $p < .01$ * $p < .05$ の有意性を表す)

「まめに会う」「まめに電話をかける」ことが重要、というこれらの友人関係スタンスは、とりあえず友人関係の親疎性や束縛性とは無関係・中立的なものと考えられる。つまり、今回の調査では、調査仮説とは別の次元・軸での傾向が認められたと言えるだろう。

そこで、これらの結果の解釈を進めるため、友人関係スタンスについての因子分析を行い、抽出された因子と群の若者語の使用度との相関傾向を探ってみることにしよう。

対象とした変数は、先に挙げたQ3-1～Q7-8の友人関係意識に関する21項目であり、回答の分布の偏りに配慮しつつ、それぞれの回答を0/1の2値に置き換えて間隔尺度化し、主成分解を用いてPromax回転を行った。(斜交回転を用いたのは、友人関係意識の構造を探るような場合には、各因子を独立と仮定する直交回転より、因子間の相関を仮定する斜交回転の方が適当だろうという判断による。) 因子数については、4～7因子までの分析を行ったが、因子負荷量と因子解釈の整合性などの面からみて最も妥当と思われたのは、6因子の場合であった。その結果得られた因子負荷量と因子間の相関を表4.3に示す。

Iは、遠慮なく悩みや本音をぶつけることができ、傷つくことやケンカも許容できる友人関係への志向、“非マサツ回避的親密性”を表す因子と解釈できよう。また、IIは友人との“(集团的)共在”、IIIは友人との“パーソナリティ一致”、IVは友人関係における“脱束縛性”への志向を表す因子として、それぞれ解釈できる。Vは、友人との接触・コンタクトそのもの、コミュニケーションのチャンネルを開いておくことを重視する態度であり、Jacobson [1960=1973 : p.191] の用語を借りるなら、“交話(phatic)志向”因子と名づけることができよう。VIは、自分を軸にして相手を選び替えるか(Q4-4)・相手を軸にして自分の性格を選び替えるか(Q4-1)の2項目の負荷の大きさと特徴づけられる因子であり、自分の周波数に合わせるか相手の周波数に合わせるかという違いはあるものの、場面や状況に応じて対人的な周波数調整(チューニング)を行うという面では共通性を見いだすことができる。この点で、“対人的チューニング志向”因子と名づけておくことにしたい。

表 4.3 友人関係スタンスに関する因子分析の結果

因子負荷量 (主成分分解、Promax 回転後)

	因子						共通性
	I	II	III	IV	V	VI	
Q3-2. 気を使わずにつきあえる	.77	.03	-.03	-.01	.07	-.14	.62
Q3-1. 悩みの相談ができる	.71	.07	.13	-.09	.06	-.09	.54
Q3-3. 悪いことは悪いと言い合える	.71	-.12	.01	.01	-.08	-.01	.52
Q7-7. 自分の本音を話すことが重要	.53	.07	.10	-.45	-.03	.16	.52
Q6-5. 傷ついても距離をおかない関係がよい	.41	.28	.11	.01	-.20	.24	.36
Q6-4. 友人とはできるだけケンカしない方がよい	-.47	-.01	.03	-.03	.38	.02	.36
Q6-3. 一人より友人という方が落ち着く	-.03	.77	.10	-.07	-.17	.07	.65
Q6-2. ふだん友人と行動することが多い	.08	.71	-.07	.01	.12	-.05	.54
Q6-1. 友人は多いにこしたことはない	-.09	.60	-.09	.10	.34	-.15	.53
Q5. 何かにつけ助けあい相談しあえる関係がよい	.28	.44	.01	-.32	.16	.06	.40
Q7-4. ものの考え方が合うことが重要	.13	-.11	.86	.05	.16	.02	.80
Q7-5. ものの感じ方が合うことが重要	.17	-.08	.84	.05	.14	-.02	.76
Q7-6. 趣味や好み合うことが重要	-.19	.24	.52	-.08	-.12	.20	.42
Q4-3. ずっと一緒だと、別の友人と話したくなる	.00	.33	.00	.72	.15	.09	.65
Q7-8. べったりしすぎないことが重要	.00	-.11	.09	.63	-.12	-.02	.43
Q4-2. ずっと一緒だと、一人になりたくなる	-.12	-.23	-.10	.57	.02	.41	.57
Q7-2. まめに電話をかけることが重要	-.03	-.03	.05	.14	.75	.04	.58
Q7-1. まめに会うことが重要	-.15	.30	.05	-.22	.54	.07	.46
Q7-3. 話のノリが合うことが重要	.09	.10	.25	-.10	.49	.26	.39
Q4-4. どこに何をしに遊びに行くかで友人を選ぶ	.09	.14	.03	.12	.14	.68	.52
Q4-1. 友人によって自分の性格が変わる	-.21	-.17	.10	-.02	.07	.64	.50
因子寄与	2.54	2.17	1.87	1.67	1.59	1.31	11.1
因子寄与率 (%)	12.1	10.3	8.9	8.0	7.6	6.2	53.1

因子間の相関

	I	II	III	IV	V	VI
I	1.00					
II	.08	1.00				
III	.16	.02	1.00			
IV	-.14	-.15	-.10	1.00		
V	-.02	.12	.08	.05	1.00	
VI	-.03	.08	.20	.00	.00	1.00

因子間の相関で比較的值が高いのは、IとIII(正の相関)、IとIV(負)、IIとIV(負)、IIIとVI(正)であり、それぞれ、親密な友人関係を志向するほど相手とのパーソナリティの一致を重んじ、相手との関係に束縛されることをいとわない、友人との集団的共在志向が強いほど相手との関係に束縛されることをいとわない、相手とのパーソナリティの一致を重んじるほど対人的チューニング志向が強い、という傾向を表している。

では、群の若者語の使用度とこれら I~VI の友人関係スタンス因子との相関傾向を、改めて検討してみることにしよう。表 4.4 は 群・群の使用度スケールと各因子得点との順位相関係数 (Spearman の) をまとめたものである。

表 4.4 若者語 群・群の使用頻度と友人関係スタンス因子との相関

	群	群
I 非マサツ回避的親密性志向	-.07	-.09
II 集団的共在志向	.08	.15*
III パーソナリティー致志向	.13	.03
IV 脱束縛性志向	.06	.02
V 交話志向	.19*	.13
VI 対人的チューニング志向	.16*	.03

(* p<.05 の有意性を表す)

非マサツ回避的親密性への志向を表す因子 I と 群の若者語の使用度スケールとの間には、有意な相関がみられない。あえて相関を認めるにせよ負の相関であり、したがって、これは弱い仮説 (群の若者語の使用は希薄な対人関係への志向と結びついていない) を支持する結果とみなしてよいだろう。

一方、強い仮説 (群の若者語の使用は束縛されない対人関係への志向と結びついている) と直接に関係すると思われる因子 IV の脱束縛性志向についても、有意な相関はみいだしえない。したがって、強い仮説はひとまず却下されたとするのが適当だろう。

群との間に、かつ 群との間にのみ有意な相関が認められたのは、因子 V の交話志向と因子 VI の対人的チューニング志向である。後づけの解釈になることは免れないが、あえてこの結果に解釈をほどこせば、次のようにも考えられる。

交話志向とは、相手とつながっていること、コミュニケーションのチャンネルを維持しておくことそのものを重視する態度である。この交話志向を端的に表す Q7-1 (まめに会うことが重要) ・ Q7-2 (まめに電話することが重要) は、表 4.1 ・表 4.2 にみたとおり、 群の若者語の使用頻度とかなりはっきりした相関傾向を示してもいた。ここで、 群の若者語の語用論的特性にたちかえって考え直してみるならば、それらは言語行為の設定する対人関係へのコミットメントを弱める機能を有するものであった。つまり、ある見方をすれば、それらはコミュニケーションにおける社会的行為の交換・応接という性格を弱めるはたらきをするわけだ。その結果として、相対的にコミュニケーションにおける交話的側面が強調されると考えられなくもない。 群の若者語の使用と交話志向とをつなぐ糸をあえて探すならば、この点に求められよう。

対人的チューニング志向と 群の若者語の使用とをつなぐ線についても、同様の考え方が可能だ。対人的周波数の同調という観点からみれば、コミュニケーションは行為の交換・応接の場ではなく、対人的共鳴・共振の場ということになる。因子 III のパーソナリティー致志向との区別に留意するならば、相手の内実への共鳴・共振ということではなく、その場その場での共鳴・共振そのものへの志向である。いわば、カラオケでその場にいる者が

リズムとメロディを介して一体感をもつようなものといえるだろうか。そのとき、歌や歌詞というのは、情報や行為の伝達媒体ではなく、ある種の共鳴・共振の媒体となっている。

群の若者語を用いることは、コミュニケーションにおける行為の交換・応接の場という性格を弱め、相対的にこうした共鳴・共振の場という性格を強める、とも考えうる。

今回の分析結果についてこのような解釈が許されるとすれば、ある対談のなかで社会学者の大澤真幸が次のように述べているところとも部分的に符合する点がある(大澤・町澤・香山 [1998])。後づけの解釈にこれ以上屋上屋を重ねるわけにはいかないが、興味をひかれる点であるので、最後に引用だけしておこう(下線は引用者)。

〔いまの若い人たちは〕人間関係を作るのが下手ではあるけれど、他方、ひとりでいることを非常に好むかというところでもない。妙に寂しがるといえるが、簡単に言えば、群れることもけっこう好きだという気がします。少し比喩的な言い方をすれば、人間関係に対する飢えみたいなものを、一方では持っているように思います。

ひとりで引きこもって完全に孤独になり、自分ひとりの世界を作って満足しているかというところ、そんなことはないんです。傷つけないけれども、自分の内面をストレートに分かってくれる、非常に直接性の高い友人関係といえますが、そういうものを求めているという感じももちます。(ibid. : p.25)

〔アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』について〕エヴァと主人公はことばをはじめとする一切の媒介を要さない、非常に直接的な関係によってつながっている。アニメーションは、関係の直接性の度合いを「シンクロ率」という語で表現しています。エヴァはパイロットの神経系との直接の共振によって動く。ところで、若い人たちの関係の基調は、言語を介した理解のようなものではなく、すごくストレートな共鳴・共振関係です。エヴァとシンジとの関係は、こうした若者たちの関係の集約する場面になっているように思います。そういう構造になっていて、若い人たちの人間関係の特性が、象徴的にアニメの中に配されていると思います。(ibid. : p.46)

§ 5 . 調査結果(3)——携帯電話・電子メール利用と友人関係

近年、急速に普及した移動体電話（携帯電話・PHSなど）と電子メールは、若者には主に友人とのコミュニケーション・メディアとして利用されている。最後にこの節では、これらの通信メディア利用と友人関係との関連を分析することにしたい。

まずは、電話一般に関する設問から簡単にみていこう。これについては、友人に電話する頻度・友人との一回あたりの平均通話時間と、電話メディアに対する意識を3設問に分けてたずねている。（なお、電話頻度については携帯電話をかける頻度との間に矛盾がみられるので〔友だちに「ほとんど毎日」電話をかける＝全体の12.6%に対し、友だちに携帯電話で一日一回以上電話をかける＝全体の36.9%〕、今回の分析の対象からは外すことにしたい。こうした矛盾が生じたのは、設問中の但し書き「携帯電話・PHSでかける場合を含む」を「除く」と読み間違えた回答者が多かったためではないかと推測される。）

各設問の回答分布は付録の単純集計結果をみていただくとして、これらの設問間の相関を示すと、表5.1のようになる（数値はSpearmanの順位相関係数）。

表 5.1 友人との通話時間・電話に対する意識の相関

	Q9	Q10-1	Q10-2	Q10-3
Q9. 友人との通話時間	1.00			
Q10-1. 電話は会って話すより人との距離を縮めてくれる	.13	1.00		
-2. 相手が目の前にいると話せないことも話しやすい	.18 *	.46 ***	1.00	
-3. 話したくなければ切ってしまうので気楽	-.11	.20 **	.17 *	1.00

(*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 の有意性を表す)

この他、友人関係スタンスの6因子・友人数・性別・一人暮らしとの関連をまとめて記述すると、通話時間に関しては、次のような統計学的に有意な傾向がみられた。（有意性が確認されなかったものについては記述していない。以下同様。）

- ・非マサツ回避的親密性志向（因子Ⅰ）が強いほど...〔 $r = .19, p < .01$ 〕
- ・対人的チューニング志向（因子Ⅵ）が強いほど...〔 $r = .17, p < .05$ 〕
- ・男性より女性の方が...〔Wilcoxonの順位和検定で $p < .001$ 〕

友人と長電話をする

また、電話に対する諸意識について有意な関連がみられたのは、“交話志向が強いほど、電話は会って話すより距離を縮めてくれると考える”〔 $r = .17, p < .05$ 〕、“女性の方が、相手が目の前にいるより電話の方が話しやすいと考える”〔Wilcoxonの順位和検定で $p < .05$ 〕の二項目のみであった。

次に、移動体電話の利用状況についてみてみよう。図5.1は、携帯電話・PHSの現利用者の分布を示したものである。ちなみに、ポケットベルの現利用者は1.0%にすぎず、かつての利用経験者（全体の57.1%）はその97%が携帯電話またはPHSにのりかえている。

今回の調査対象者における携帯電話・PHSの利用率は9割に上っている。郵政省が99年9月7日に発表した調査結果によると、8月末時点で日本の全人口にしめる携帯電話・PHSの個人普及率は40.5%であり、数値としてはその倍以上になる。大学生への普及がいかに著しいかがうかがえよう。

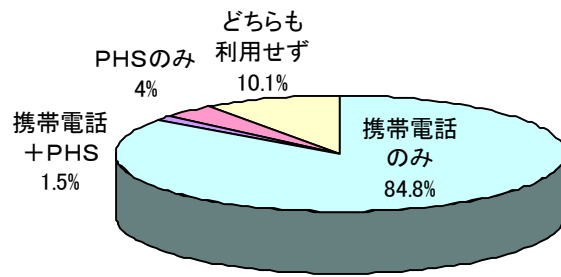


図5.1 携帯電話・PHSの利用率

また、利用者と非利用者の中で、友人関係スタンスの6因子・友人数・性別・一人暮らしに関する比較を行ってみたが(Wilcoxonの順位和検定と²検定)いずれについても $p < .05$ 水準を上回る有意な差はみられなかった。

つづいて、移動体電話の利用者におけるその利用状況をみていこう(以下の数値は携帯電話・PHSの利用者ベース、 $N=178$)。

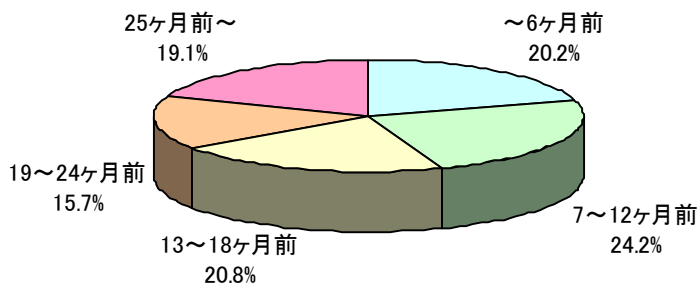


図5.2 携帯電話・PHSの利用開始時期

図5.2は利用開始の時期を示したものである。この1年以内に利用し始めた者が半数近くを占めており、この間の普及の急速さがうかがえよう。

友人関係スタンス6因子・友人数・電話に対する意識3項目・性別・一人暮らしとの関連では、次のような傾向が有意と認められた。

- ・友人数が多いほど... [$r = .25, p < .001$]
- ・集団的共在志向(因子II)が強いほど... [$r = .23, p < .01$]
- ・女性より男性の方が... [t検定で $p < .05$]
- ・一人暮らしではない方が... [t検定で $p < .05$]

早くから携帯電話・PHSを利用している

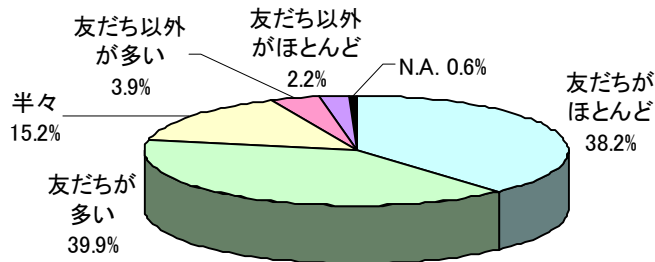


図5.3 携帯電話・PHSの通話相手

図5.3は、携帯電話・PHSで話す相手として、友人と友人以外のどちらが多いかを示したものである。予想されたとおり、通話相手はやはり友人がメインであり、「友だちと話す場合がほとんど」「友だちと話すことの方が多い」を合わせると8割近くに上る。

そうした友人との通話頻度を、かける場合とかかってくる場合に分けて示したものが、
図 5.4 である。これをみると、ほぼ半数が毎日、移動体電話で友人と話している。

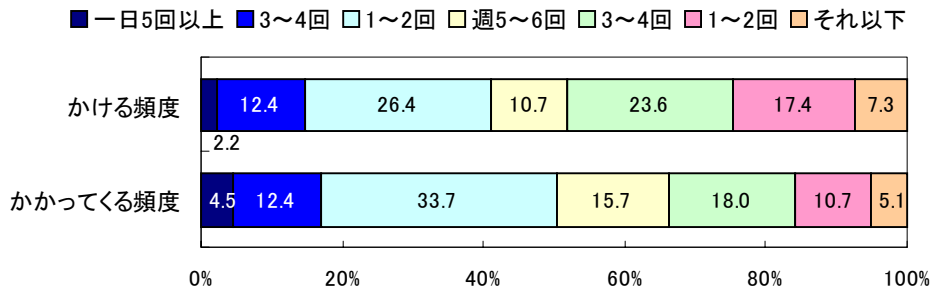


図 5.4 携帯電話・PHSによる友人との通話頻度

移動体電話で友人に電話をかける頻度と、友人関係スタンス 6 因子・友人数・電話に対する意識 3 項目・性別・一人暮らしとの間には、次のような関連がみられた。

- ・集団的共在志向（因子 II）が強いほど... [$r = .18, p < .05$]
- ・電話は話したくなければ切ってしまうので気楽（Q10-3）と
思う人ほど... [$r = .16, p < .05$]
- ・男性より女性の方が... [Wilcoxon の順位和検定で $p < .001$]

携帯電話・PHSで友人によく電話をかける

ここでさらに詳しく、友人関係についての各設問レベルで相関係数をとって見たところ、「Q4-4. どこに何をしに遊びに行くかで友だちを選ぶ」との間にのみ、 $r = .19$ の有意な正の相関が認められた ($p < .05$)。前回の調査でも、この友人関係の切り替え志向と携帯電話・PHSの所有は有意に関連している（辻 [1999b : p.30]）。友人関係の切り替え志向は移動体電話の利用と親和的なようであり、このことは、携帯電話やPHSが友人とのコミュニケーションのチャンネルを気軽に切り替えることのできるある種の「リモコン」になっている様子を思わせる。こうした友人関係のリモコン装置を思わせる分析結果は、以下でもいくつかでてくるので、適宜ふれていくことにしたい。

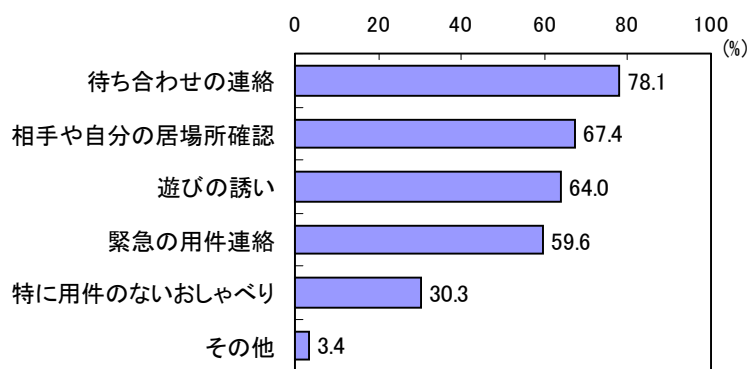


図 5.5 携帯電話・PHSで友人と話す内容

次に、移動体電話では友人とどのような話をする人が多いかを、図 5.5 にみてみよう（複数回答）。待ち合わせの連絡や居場所の確認が多いことは、移動体電話らしい利用と言えるだろうが、一方で「特に用件のないおしゃべり」をすることが多いという回答も 3 割に上る。

この3割をそれ以外の者と比較したところでは、先の友人関係の切り替え志向（Q4-4）についてのみ有意に高いという差がみられ（Wilcoxonの順位和検定で $p < .05$ ）、それ以外の項目（友人関係についての諸設問・6因子、電話に対する意識、性別、一人暮らし）では有意差がなかった。

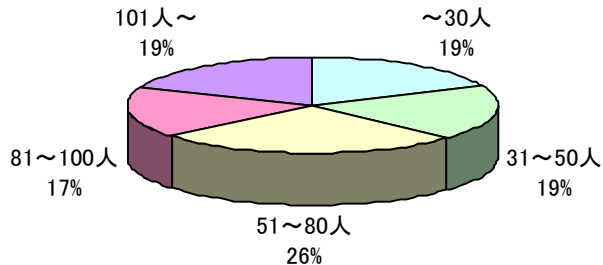


図5.6 友人の電話番号のメモリ登録数

携帯電話・PHSのメモリに友人の電話番号をどれくらい登録しているかをみると、図5.6のような分布になった。平均値は77人、中央値は70人、最小値10人、最大値200人である。

この友人登録数については、以下のような傾向が認められた。

- ・友人数が多いほど... [$r = .29, p < .001$]
- ・非マサツ回避的親密性志向（因子I）が強いほど... [$r = .15, p < .05$]
- ・集団的共在志向（因子II）が強いほど... [$r = .19, p < .01$]
- ・ずっといっしょだと別の友人と話したくなる（Q4-3）という人ほど... [$r = .16, p < .05$]
- ・どこに何をしに遊びに行くかで友人を選ぶ（Q4-4）という人ほど... [$r = .19, p < .05$]
- ・友人は多いにこしたことはない（Q6-1）という人ほど... [$r = .20, p < .01$]

友人のメモリ登録数が多い

ここでもやはり友人関係の切り替え志向（Q4-4）が正の相関を示しており、たとえば友人数との相関を考慮するにしても、偏相関値は $r = .15$ で依然として有意である（ $p < .05$ ）。

さて、最近の携帯電話・PHSにはメール機能をもつものが多い。それを利用した友人とのやりとりの状況を示したものが、図5.7である。

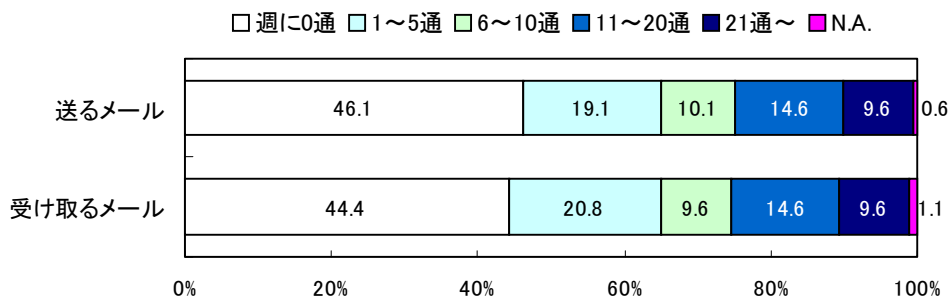


図5.7 携帯電話・PHSで友人とメールをやりとりする頻度

これらメールを送る・受け取る頻度については、男性より女性の方がよくやりとりをす

る傾向がみられた (Wilcoxon の順位和検定でいずれの頻度についても $p < .05$ の有意差) が、友人関係についてはどの設問・因子とも有意な関連はみられなかった。

インターネットやパソコン通信による電子メールの利用率も、女性の方が高い。図 5.8 は、その利用率を回答者の全体と男女別で示したものである。男女差について² 検定を行ったところでは、 $p < .05$ の有意差が認められた。

その他では、友人関係の面で、電子メール利用者にパーソナリティ一致志向 (因子 III) がやや低い傾向がみられる (Wilcoxon の順位和検定で $p < .05$) のみであった。

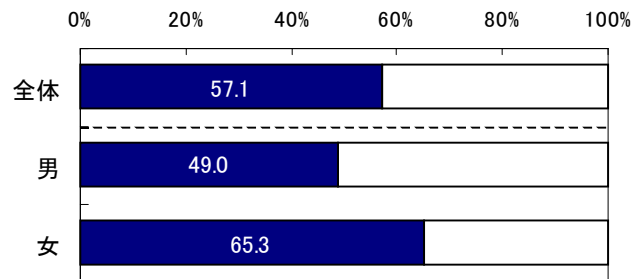


図5.8 インターネット・パソコン通信による電子メールの利用率

インターネットやパソコン通信を使って電子メールを利用する目的 (複数回答) としては、図 5.9 に示されるように、「友人や知人とのやりとり」が圧倒的に多い (以下、数値はすべてインターネットやパソコン通信による電子メール利用者ベース、 $N=113$)。携帯電話ほどではないにせよ、電子メールもまた友人関係をとつメディアとして徐々に浸透しつつあるようだ。ちなみに、「その他」としては就職活動のために挙げる回答が目についた。

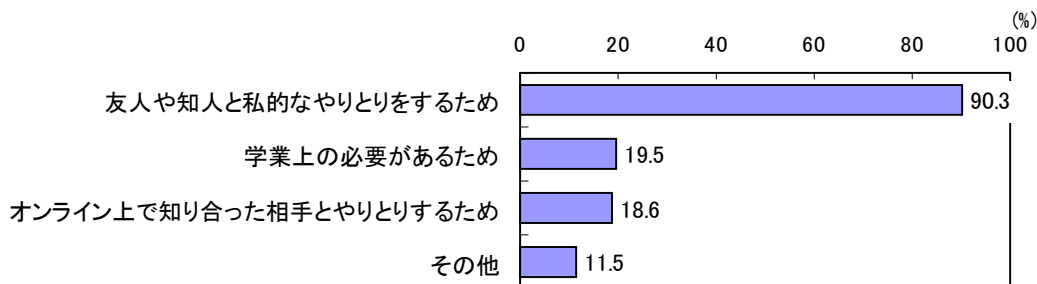


図 5.9 電子メールの利用目的

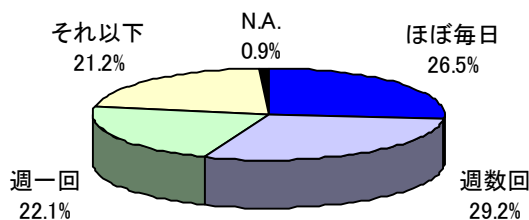


図5.10 電子メールの利用頻度

電子メールを利用する頻度は、図 5.10 のとおりである。毎日利用する者は 4 人に 1 人くらいで、先にみた携帯電話・PHS の利用頻度よりはやはり低い水準にとどまる。ちなみに、電子メールの利用頻度と、携帯電話・PHS で友人に電話をかける頻度、かかってくる頻度との間に相関はみられなかった (それぞれ $r = .08$ 、 $r = -.01$ で n.s.)

最後に、週あたりの電子メール送信数・受信数を、図 5.11 に示す。中央値はいずれも 3 通であった (平均値は送信 5 通・受信 8 通、最大値は送信 30 通・受信 50 通)。

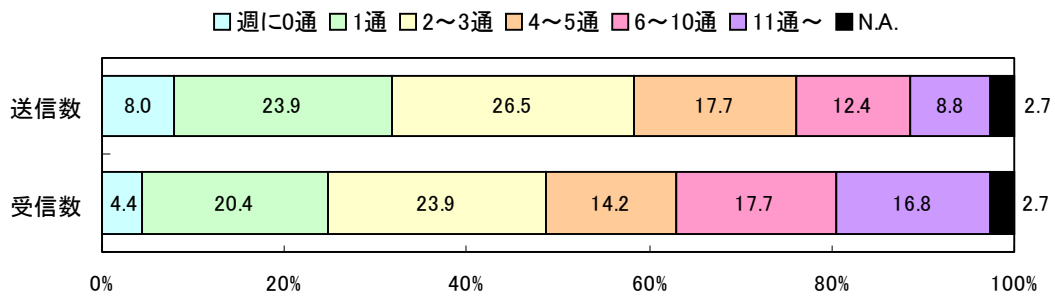


図 5.11 電子メールの送信数・受信数

この電子メールの送信数について、友人数・友人関係スタンス 6 因子、性別、一人暮らしとの関連を分析してみたが、いずれも統計学的に有意な関連はみられなかった。友人関係については設問のレベルで、「Q4-1．友人によって自分の性格が変わる」($r = -.31, p < .01$)、「Q7-2．友人とはまめに電話をかけることが重要」($r = -.24, p < .05$)との間に有意な負の相関が認められたが、携帯電話・PHSの場合とは違って友人関係の切り替え志向(Q4-4)とは無相関であった。この違いが、電子メールと移動体電話のメディア特性によるものであるのか、普及段階の差によるものであるのかは、今後の検討にゆだねることにしたい。

参考文献

- 橋元良明 1998 「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動」, 竹内郁郎ほか編『メディア・コミュニケーション論』, 北樹出版
- Jacobson, R. 1960 Closing Statement: Linguistics and Poetics, T.A. Sebeok(ed.), *Style in Language*, Technology Press of Massachusetts Institute of Technology.
=1973 八幡屋直子訳「言語学と詩学」, 川本茂雄監修『一般言語学』, みすず書房
- 大平 健 1995 『やさしさの精神病理』, 岩波書店(岩波新書)
- 大澤真幸・町澤静夫・香山リカ 1998 『心はどこに行こうとしているか』, マガジンハウス
- 千石 保 1994 『マサツ回避の世代』, PHP 研究所
- 辻 大介 1996 「若者におけるコミュニケーション様式変化」, 『東京大学社会情報研究所紀要』51号, pp.42-61(also available in <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsujidai/paper/p02/paper02.htm>)
- 辻 大介 1999a 「「とか」弁のコミュニケーション心理」, 『第3回社会言語科学会研究大会予稿集』, pp.19-24 (also available in <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsujidai/paper/p07/paper07.htm>)
- 辻 大介 1999b 「若者語と対人関係——大学生調査の結果から」, 『東京大学社会情報研究所紀要』57号, pp.17-42(also available in <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsujidai/paper/p08/paper08.htm>)
- 辻 大介 1999c 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」, 橋元良明編『子ども・青少年とコミュニケーション』, 北樹出版〔印刷中〕

【付録】調査票と単純集計結果

《有効回答数 N=198》

以下、集計結果の数値の単位は、特に断りのない限りすべて%。

大学生の言語・コミュニケーション意識に関するアンケート

アンケート記入にあたっての注意

このアンケートは、大学生の言語行動とコミュニケーション行動の実態をつかむために実施するものです。データは、全員の回答について、コンピュータを使って統計学的に処理します。各個人についての分析はまったく行いませんし、個人のデータが公表されるようなことも絶対にありません。

また、アンケートを提出すれば平常点として5点を成績に加えますが、回答の中身（どう回答したか）によって成績評価を変えることはしませんので、正直に答えてください。

ただ、まじめに答えているかどうかは、ある程度コンピュータでチェックすることができますので、あまりにいいかげんな回答の場合は0点とします。

あまり考えこまず、直感的に回答してもらえば、けっこうです。

まず、自分の学生証をみて、あなたの学籍番号（学生証番号）を記入してください。ここに記入がなかったり、読みにくかったり、まちがっていたりすると、平常点を成績に加えられなくなりますので、注意して確実に記入してください。

社

--	--

 ~

--	--	--	--

次に、性別と年齢を記入してください。

1.男	2.女
-----	-----

 満

--	--

 歳

男 50.5 女 49.5 20歳 48.0 21歳 36.9 22歳 11.6 23歳 2.5 24歳 1.0

では、問1から順に回答をお願いします

問1 2~9ページにあげる(A)~(H)のようなことばづかい（下線を引いてある部分）について、それぞれ ~ の質問に答えていってください。

(A) 「あんまりしつこいから、完全にキレてしもた」

(標準的とされることばづかい 「頭にきて」)

あなたのまわりの友だちや知り合い(直接知らない芸能人などは除く)が、こういったことばづかいをすることはありますか?(あてはまる番号に一つだけ)

1. よくある 2. ときどきある 3. あまりない 4. まったくない

テレビやラジオで芸能人・タレントなどが、こういったことばづかいをしているのを、聞いたことはありますか?(一つだけ)

1. よく聞く 2. ときどき聞く 3. あまり聞かない 4. まったく聞かない

あなた自身がこういったことばづかいをすることはありますか?(一つだけ)

1. よくする 2. ときどきする 3. あまりしない 4. まったくしない

こういったことばづかいが、耳ざわりに感じたり、気になったりすることはありますか?(一つだけ)

1. 気になる 2. どちらかといえば気になる 3. どちらかといえば気にならない 4. 気にならない

こういったことばづかいをするのは、若者(10代~20代)だけだと思いますか、若者に限らないと思いますか?(一つだけ)

1. 若者だけだと思う 2. 若者に限らないと思う 3. わからない

こういったことばづかいをするのは、親しい間柄(例えば仲のよい友だち)に限った方がよいと思いますか、それほど親しくない目上の人(例えば先生)に対してもかまわないと思いますか?(一つだけ)

1. 親しい間柄に限った方がよい 2. 目上の人に対してもかまわない 3. 目上の人に対してはむしろ使った方がよい

以下、(B)～(H)の設問形式は(A)と同じ。集計結果はまとめて記す。

(B) 「なんか体の調子、悪そうやん。カゼでもひいた？」
 「ってゆうか、ちょっと疲れてるだけ」

(標準的とされることばづかい 「いや(しいえ) ちょっと…」)

(C) 「今日のバイト、めっちゃ(超)疲れた」

(標準的とされることばづかい 「すごく」「とても」)

(D) 「あの映画、おもしろかった？」
 「まあ見ても損はせえへんかな、って感じ」

(標準的とされることばづかい 「損はせえへんかな」)

(E) 「きのうの抜き打ちテスト、みんなパニックってた」

(標準的とされることばづかい 「あわててた」)

(F) 「今度の日曜、梅田とか行って、映画とか見いへん？」

(標準的とされることばづかい 「梅田行って、映画見いへん？」)

(G) 「今、スキーにはまってんねん」

(標準的とされることばづかい 「夢中になって」)

(H) 「就職活動、がんばってる？」
 「ぼちぼち気合い入れようかなあ、みたいな」

(標準的とされることばづかい 「気合い入れようかなあ」)

あなたのまわりの友だちや知り合い(直接知らない芸能人などは除く)が、こういったことばづかいをすることはありますか？(あてはまる番号に一つだけ)

	1. よくある	2. ときどきある	3. あまりない	4. まったくない	N.A.
(A)	58.6	32.8	7.6	1.0	0.0
(B)	61.1	32.3	6.1	0.5	0.0
(C)	93.9	6.1	0.0	0.0	0.0
(D)	27.8	35.4	29.8	7.1	0.0

(E)	19.2	39.9	36.9	4.0	0.0
(F)	49.5	20.2	25.3	5.1	0.0
(G)	80.8	18.7	0.5	0.0	0.0
(H)	9.1	25.8	42.9	22.2	0.0

テレビやラジオで芸能人・タレントなどが、こういったことばづかいをしているのを、聞いたことはありますか？（一つだけ）

	1. よく聞く	2. ときどき聞く	3. あまり聞かない	4. まったく聞かない	N.A.
(A)	28.3	55.6	16.2	0.0	0.0
(B)	47.0	40.4	12.1	0.5	0.0
(C)	64.1	30.3	5.1	0.5	0.0
(D)	28.8	44.4	25.8	1.0	0.0
(E)	10.6	42.4	43.9	3.0	0.0
(F)	33.8	30.3	32.3	3.5	0.0
(G)	67.2	28.3	4.0	0.5	0.0
(H)	12.1	49.0	32.8	6.1	0.0

あなた自身がこういったことばづかいをすることはありますか？（一つだけ）

	1. よくする	2. ときどきする	3. あまりしない	4. まったくしない	N.A.
(A)	24.7	47.5	23.2	4.5	0.0
(B)	46.0	36.9	13.1	4.0	0.0
(C)	87.4	9.6	2.0	1.0	0.0
(D)	19.7	28.8	27.8	23.7	0.0
(E)	15.2	18.7	40.4	25.8	0.0
(F)	42.9	16.7	26.8	13.6	0.0
(G)	66.2	25.3	7.6	1.0	0.0
(H)	5.6	15.7	28.3	50.5	0.0

こういったことばづかいが、耳ざわりに感じたり、気になったりすることはありますか？（一つだけ）

	1. 気になる	2. どちらかといえば気になる	3. どちらかといえば気にならない	4. 気にならない	N.A.
(A)	2.5	19.7	47.5	30.3	0.0
(B)	5.6	23.7	37.4	33.3	0.0
(C)	2.0	4.5	22.7	70.7	0.0
(D)	18.7	32.3	29.3	19.7	0.0
(E)	9.1	14.1	41.4	35.4	0.0
(F)	5.6	19.2	31.8	43.4	0.0
(G)	1.0	2.0	22.2	74.7	0.0
(H)	32.3	39.4	19.2	9.1	0.0

こういったことばづかいをするのは、若者（10代～20代）だけだと思いますか、若者に限らないと思いますか？（一つだけ）

	1. 若者だけだと思う	2. 若者に限らないと思う	3. わからない	N.A.
(A)	47.0	45.5	7.6	0.0
(B)	61.6	34.8	3.5	0.0
(C)	39.9	56.1	4.0	0.0
(D)	71.7	19.2	9.1	0.0
(E)	75.3	20.7	4.0	0.0
(F)	30.8	58.1	11.1	0.0
(G)	27.8	69.2	3.0	0.0
(H)	87.9	8.1	4.0	0.0

こういったことばづかいをするのは、親しい間柄（例えば仲のよい友だち）に限った方がよいと思いますか、それほど親しくない目上の人（例えば先生）に対してもかまわないと思いますか？（一つだけ）

	1. 親しい間柄に限った方がよい	2. 目上の人に対してもかまわない	3. 目上の人に対してはむしろ使った方がよい	N.A.
(A)	90.4	9.1	0.5	0.0
(B)	84.3	15.7	0.0	0.0
(C)	64.6	33.8	1.5	0.0
(D)	88.4	11.6	0.0	0.0
(E)	86.9	12.6	0.5	0.0
(F)	51.0	48.0	1.0	0.0
(G)	40.4	59.1	0.5	0.0
(H)	97.0	3.0	0.0	0.0

問2 あなたには「友だち」とよべる人が何人くらいいますか？（一つだけ）

1. いない	0.0	6. 9～10人	17.7	
2. 1～2人	1.0	7. 11～15人	19.7	
3. 3～4人	8.6	8. 16～20人	9.1	
4. 5～6人	13.6	9. 21人以上	17.7	
5. 7～8人	11.6			N.A. 1.0

問3 あなたにとって「友だち」とはどういう人ですか？次の～について、それぞれ一つずつをしていってください。

	1. イ エ ス	2. どとイ ち言エ らえス かば	3. どとノ ち言 らえ かば	4. ノ ノ ノ ノ	N.A.
友だちには悩みごとの相談ができる	42.4	51.5	5.6	0.5	0.0

友だちとはあまり気をつかわずに つきあえる	55.1	35.9	7.1	2.0	0.0
友だちとは悪いことは悪いと 言い合える	39.4	46.5	13.6	0.5	0.0

問4 友だちとのつきあいで、次のようなことがありますか？（一つずつ）

	1. よく ある	2. とき どある	3. あ ま り な い	4. ほ と ん な ど い	N.A.
話をする友だちによって自分の性格が 変わるようなこと	14.1	49.0	25.3	11.1	0.5
仲のいい友だちでも、ずっといっしょに いると、一人になりたくなるようなこと	19.7	50.5	22.2	7.6	0.0
仲のいい友だちでも、ずっといっしょに いると、別の友だちと話したくなるようなこと	7.6	40.4	41.4	10.6	0.0
どこに何をしに遊びに行くかによって、 いっしょに行く友だちを選ぶようなこと	24.7	50.5	19.7	5.1	0.0

問5 あなたにとって、望ましい友人関係とは、次のどちらに近いですか？（一つだけ）

A．何かにつけて、助け合ったり悩みを相談し合ったりできる関係

B．つきあう範囲のけじめをつけて、お互いにあまり寄りかからない関係

1. Aに近い	2. どちらかと いえばA	3. どちらかと いえばB	4. Bに近い	
32.8	46.0	17.7	3.5	N.A. 0.0

問6 次の ~ にあけるA・Bについて、あなたはそれぞれどちらに近いですか？
一つずつ をして行ってください。

	1. A に 近 い	2. ど ち い ら え か と A	3. ど ち い ら え か と B	4. B に 近 い	いずれも	N.A.	0.0
A 友だちは多いに こしたことはない	20.7	36.9	19.7	22.7	B	別に少なくとも かまわない	

A	ふだん友だちと行動することが多い	15.7	30.3	36.9	17.2	B	ふだん一人で行動することが多い
A	友だちという方が落ち着く	9.6	32.3	42.9	15.2	B	一人にいる方が落ち着く
A	友だちとはできるだけケンカしない方がよい	18.2	40.4	28.3	13.1	B	場合によってはむしろケンカした方がよい
A	お互いに傷つくことがあっても、距離をおかない友だちづきあいの方がよい	12.1	45.5	34.3	8.1	B	お互いに傷つくことがあるよりは、距離をおいた友だちづきあいの方がよい

問7 友だちとつきあう上で、次の ~ にあがるようなことは重要だと思いますか？
一つずつ をしてってください。

	1. 重要	2. やや重要	3. あまりでない	4. 重要でない	N.A.
まめに会うこと	8.6	41.9	39.9	9.6	0.0
まめに電話をかけること	5.1	23.2	53.0	18.7	0.0
話のノリが合うこと	59.6	38.4	1.5	0.5	0.0
ものの考え方が合うこと	44.9	41.4	11.6	2.0	0.0
ものの感じ方が合うこと	41.4	41.4	15.2	2.0	0.0
趣味や好み合うこと	23.2	45.5	25.8	5.6	0.0
自分の本音を話すこと	47.5	44.4	8.1	0.0	0.0
べったりしすぎないこと	22.7	51.5	21.7	4.0	0.0

問8 あなたは友だちに電話をどれくらいかけますか？（携帯電話・PHSでかける場合も含まれます。）あてはまるものに一つだけ をつけてください。

1. ほとんど毎日 12.6	2. 週4～6回 16.7	3. 週2～3回 33.3	4. 週1回くらい 19.7
5. 月1～2回 11.6	6. 年に数回 4.5	7. まったくかけない 1.5	N.A. 0.0

問9 あなたはふだん、友だちと電話でどれくらいの時間話すことが多いですか？
一回あたりの平均通話時間に、一つだけ をつけてください。

1. 5分以内 20.2	2. 6～10分くらい 20.2	3. 11～20分くらい 19.7	
4. 21～30分くらい 12.1	5. 30分～1時間くらい 20.2	6. 1時間以上 7.6	N.A. 0.0

問10 電話について、あなたは次の ～ のように思いますか？（一つずつ）

	1. そう 思う	2. やや 思う	3. あ思 まわ りな い	4. そ思 うわ ない	N.A.
電話は、実際に会って話すよりも 人との距離を縮めてくれる	4.5	23.7	47.0	24.2	0.5
相手が目の前にいるときには 話せないことも電話でなら話しやすい	17.2	37.9	28.3	16.2	0.5
電話は、話したくなければ 切ってしまうので気楽だ	5.6	16.2	41.4	36.4	0.5

問11 あなたは、次の(a)～(c)にあげるものを使っていますか？（一つずつ）

(a) 携帯電話 N.A. 0.0	1. 使っている (<input type="text"/> 年 <input type="text"/> ヶ月くらい前から) 86.4 利用者平均 1年4ヶ月前	
	2. 使っていたが、今は使っていない	1.0
	3. 使ったことはないが、使いたいと思う	5.6
	4. 使ったことはないし、使いたいとも思わない	7.1
(b) PHS N.A. 8.1	1. 使っている (<input type="text"/> 年 <input type="text"/> ヶ月くらい前から) 5.1 利用者平均 1年2ヶ月前	
	2. 使っていたが、今は使っていない	29.3
	3. 使ったことはないが、使いたいと思う	3.5
	4. 使ったことはないし、使いたいとも思わない	54.0
(c) ポケベル N.A. 5.1	1. 使っている	1.0
	2. 使っていたが、今は使っていない	57.1
	3. 使ったことはないが、使いたいと思う	1.0
	4. 使ったことはないし、使いたいとも思わない	35.9

問12 【携帯電話・PHSを使っている人への質問です。
 どちらも使っていない人は次の問13へ進んでください。】

以下、～の数値は携帯電話・PHS利用者ベース（N=178）

あなたは、携帯電話・PHSで、どれくらい友だちに電話をかけますか？

1. 一日5回以上 2.2	2. 一日3～4回 12.4	3. 一日1～2回 26.4	N.A. 0.0
4. 週5～6回 10.7	5. 週3～4回 23.6	6. 週1～2回 17.4	7. それ以下 7.3

あなたの携帯電話・PHSには、どれくらい友だちから電話がかかってきますか？

1. 一日5回以上 4.5	2. 一日3～4回 12.4	3. 一日1～2回 33.7	N.A. 0.0
4. 週5～6回 15.7	5. 週3～4回 18.0	6. 週1～2回 10.7	7. それ以下 5.1

あなたは携帯電話・PHSで、友だちとどのような話をする事が多いですか？
 次の中から、いくつでも をつけてください。

1. 待ち合わせの連絡 78.1	2. 遊びの誘い 64.0	3. 緊急の用件連絡 59.6
4. 特に用件のないおしゃべり 30.3	5. 相手や自分の居場所の確認 67.4	
6. その他（具体的に： ） 3.4		

あなたの携帯電話・PHSのメモリには、何人くらいの友だちの電話番号が登録してありますか？

人くらい 平均 76.7 人

あなたは携帯電話・PHSを使って、友だちとどれくらいメールのやりとりをしますか？（しない場合は「0」を記入してください）

友だちに送るメール 週に 通くらい 平均 8.0 通

友だちから受け取るメール 週に 通くらい 平均 8.2 通

携帯電話・PHSで、友だち以外の相手（家族やアルバイト先の人など）と話すことはどれくらいありますか？（かける場合もかかってくる場合も含まれます）

1. 友だちと話す場合がほとんど 38.2	
2. 友だちと話すことの方が多い 39.9	
3. 友だちと話す場合と友だち以外と話す場合が半々くらい 15.2	
4. 友だち以外と話すことの方が多い 3.9	
5. 友だち以外と話す場合がほとんど 2.2	N.A. 0.6

問13 あなたは、インターネットやパソコン通信を使って、電子メールのやりとりをすることはありますか？

1. ある	2. ない	N.A.
57.1	42.9	0.0

「1.ある」に をした人は
次の質問に答えてください。

「2.ない」に をした人は
問14に進んでください。 ----->

以下、 ~ の数値は電子メール利用者ベース (N=113)

どれくらいの頻度で電子メールを利用しますか？ (一つだけ)

1. ほぼ毎日	2. 週に数回くらい	3. 週に1回くらい	4. それ以下
26.5	29.2	22.1	21.2

N.A. 0.9

週に何通くらい電子メールを送信・受信しますか？

送る電子メール 週に 通くらい 平均 4.9 通

受け取る電子メール 週に 通くらい 平均 7.9 通

主にどこで電子メールを利用していますか？ (一つだけ)

1. 主に自宅で	2. 主に学校で	3. 自宅と学校で	4. その他
48.7	45.1	5.3	0.9

N.A. 0.0

あなたが電子メールを使っている目的は何ですか？

あてはまるものにいくつでも をつけてください。

1. 学業上の必要があるため (例えば情報処理関係の授業を受けているなど)	19.5
2. 友人や知人と私的なやりとりをするため	90.3
3. インターネットやパソコン通信で知り合った相手とやりとりするため	18.6
4. その他 (具体的に:)	11.5

問14 あなたは今、ひとり暮らしですか、
家族と暮らしていますか？

1. ひとり暮らし	36.4	N.A.
2. 家族と暮らしている	63.6	0.0

問15 あなたの出身 (大学入学以前に暮らしていたところ) はどこですか？

1. 大阪府	2. 京都府	3. 兵庫県	4. 奈良県	5. 和歌山県	6. 滋賀県
34.8	8.6	13.1	9.6	2.5	3.5
7. それ以外 (都道府県名を記入:) 27.8					
8. 日本以外 (国名を記入:) 0.0 N.A. 0.0					